

ビジュアル・リタラシーとカルチュラル・リタラシー： 絵本に読む日系アメリカ人のアイデンティティー

—異文化理解の一例として—

岩 野 雅 子

Visual Literacy and Cultural Literacy :
Reading Japanese-Americans' Cultural Identity from Picture Books
—as an exemplar for understanding other cultures—

Masako IWANO

はじめに

異文化間教育学の学問分野としての確立は、おそらく1981年の異文化間教育学会の発足、あるいは1987年における異文化間教育学研究誌の発行によるところが大きい¹⁾。異文化間教育という概念は、比較教育学等の分野において既に論じ始められてはいたものの²⁾、それが独立した一つの研究分野として広く認識されるのは1990年代になってからである³⁾。

当初、異文化間教育学が取り扱ってきた研究テーマは主として日本における教育の国際化に関わる現象であり、例えば異文化間コミュニケーションとしての英語教育、外国人留学生のカルチャー・ショックと日本語教育、または帰国子女問題等であった。以後、国際理解から異文化理解へという意識の広がりに伴い、研究課題も多岐にわたるようになる。例えば、アメリカ、オーストラリア、カナダ、イギリス等の西洋文化圏で1960年代以降登場し様々な教育改革を生んできた多文化教育や、文化的アイデンティティーに関する教育課題等が学会誌の主要テーマとして取り上げられるのは1990年代である。

社会の変革に伴って教育の変革が行われるのか、あるいは教育の変革から社会の変革を導く人材が育つのかは未だ論じられるところであるが、概して教育改革には時間を要する場合が多

い。様々な学問領域の中でも比較的保守的といわれる教育関係分野ではあるが、近年の変化には顕著なものがみられる。従来の一元的、画一的な世界観、人生観、学習観に基づく教育理論や実践から、多元的なものへの移行は、その一例であろう。文化人類学や社会学等の分野において、日本社会や日本文化について多文化的な見方が紹介され論じられるようになり⁴⁾、それは今後の教育の在り方に大きな影響を与えていくであろうことが予想される。異文化間教育学の過去15年の歩みと重ねあわせるならば、異文化理解や異文化読解、異文化間コミュニケーションといった言葉が、教育理論や教育現場においてキーワードの一つになることは必然であろう。

こうした教育のグローバル化に伴い、日本社会のどの地域に住もうとも、人権の尊厳を守り、人格の多様性を尊重し、多文化共生や異文化理解に寛容な人間を育成することが重要視されるに至った。1996年の異文化間教育学会において、文化を読み書きする能力、即ちカルチュラル・リタラシー育成への取り組みに焦点が当てられた背景には、このような時代の流れがあったことが考えられるのである。

1. ビジュアル・リタラシーとカルチュラル・リタラシー

ビジュアル・リタラシー (visual literacy) という概念は1970年代に登場した。特に学校教育においては、言語を媒体とする文章や文学作品を読んだり書いたりするのと同様に、視覚言語を媒体とする芸術や文化財を「読み」、「書く」能力育成の重要性が唱えられた。例えば、イギリスではBBCテレビで視覚言語による物の見方のシリーズが放送され反響を呼ぶとともに、教育関係者に新しい指針を与えた。また、このシリーズをもとにして編集された著書では、7章で構成されたテキストの内3章分、即ち、第2章、第4章、第6章が視覚言語のみで語られ、読者はそのビジュアル・メッセージを読みとるという試みがなされている⁸⁾。以後、視覚言語や視覚芸術を取り扱う分野においては、コミュニケーション行動を2つのものからなるとし、これを言語 (verbal language) を媒体とする言語コミュニケーション (verbal communication) と、視覚言語 (visual language) を媒体とする視覚言語コミュニケーション (visual communication) に分類する説が強調されたが⁹⁾、分野を越えて広く認識を得るには至っていない。その一因については、本論で後述するところである。ともあれ、西洋諸国において、ビジュアル・リタラシーはバーバル・リタラシーと同様に、すべての子ども達が身につけておくべき能力だとする論争が盛んに行われていた時期に、日本の教育関係分野においてはビジュアル・リタラシーが論じられることは稀であった。が、近年、映像を読む能力を基礎的能力の一つとする見解も指摘されており⁷⁾、今後のこの領域の発展が待たれる。

視覚言語を読むビジュアル・リタラシーでは、視覚的に審美性やデザイン性を吟味したり、その背後にある歴史的、社会的、文化的メッセージを読みとったりすることになる。モダニズムの思想が一般的であった時代には、視覚言語は世界共通の言語であり、何をもって美 (aesthetics) とするかには永遠の真理や法則があり、それはどの民族にも共通であるとされていた。しかしながら、ポストモダニズムの思想に

移行した近年においては、審美性は文化に影響されるものであり、時代や民族や作者などによって異なる文化的背景に配慮しながらメッセージを読みとることを重要視するようになってきている⁸⁾。多民族、多文化社会を構成する一員として、あるいはグローバル・ビレッジに生きる一員として、様々な文化的背景を持つ人々が創り出す視覚的環境を正確に読みとり、視覚言語によるメッセージを受け取り、応えることのできる能力の育成は、異文化を読解し、異文化を理解し、異文化間でコミュニケーションを行う場合に役立つものと考えられる。

1970年代末には、視覚言語を取り扱う教育分野における主要な研究テーマが、ビジュアル・リタラシーからカルチュラル・リタラシーへと移行した⁹⁾。私たちを取り巻く視覚的な環境や、それを取り扱う視覚教育、あるいは教育教材などにみられる自文化中心主義や文化的ステレオタイプ、文化的偏見、差別等を見直し、マイノリティーの立場から見た歴史や世界観を反映しようとする宣言もなされるようになった。また、1980年代になると、ユネスコの提唱する文化理解のための教育研究が進められ、学校教育で各教科が異文化理解や多文化教育の進展にどのように貢献できるかについての模索が行われた¹⁰⁾。このようにして、視覚言語による文化の読解が強調されるにつれて、教育用語として盛んに使われていたビジュアル・リタラシーという言葉は、カルチュラル・リタラシーとほぼ同義語のように使われるようになっていったのである。更に、1990年代になるとポストモダニズムの教育思想が定着し、多様な文化を視覚的に読み、理解し、反応できる能力は、世界市民育成に不可欠なものという主張がなされるようになってきている。

このような教育論争は日本においてはほとんどなされなかったのであるが、近年の国際理解教育推進の一環として、視覚言語による異文化理解の必要性が唱えられ始めている。

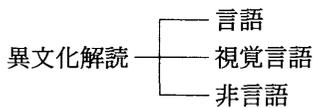
2. ビジュアル・リタラシーによる異文化読解の可能性と限界

異文化間コミュニケーションでは、一般にコ

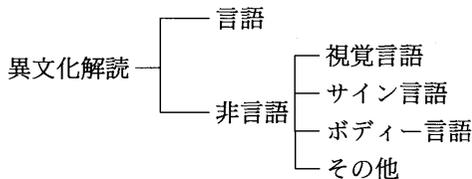
コミュニケーション活動を言語と非言語によるものに分類している。前者のバーバル・コミュニケーション (verbal communication) では、文字や語彙、発音、文法などを手がかりに異文化解説が行なわれ、後者のノン・バーバル・コミュニケーション (non-verbal communication) では、しぐさや身ぶり、行動パターン、サイン・ランゲージ、ボディ・ランゲージなどを手がかりにメッセージをやり取りしたり、文化的背景を読みとることになる¹¹⁾。しかしながら、こういった従来のモデルでは未だ視覚言語については言及されていない現状にある。その原因の一つとして、視覚言語が異文化解説に果たす役割について自らの領域の中で論議を展開するに止まっており、異文化間コミュニケーションという立場での討論がなされていないことが挙げられよう。

そこで、ここで仮に視覚言語を従来の異文化間コミュニケーションのモデルに当てはめてみるならば、異文化解説の手だてを示すものとして次の二つが考えられる。

モデル1：視覚言語を独立した媒体とする場合



モデル2：視覚言語を非言語の一つとする場合



視覚言語で解説されるものには、絵画、彫刻、デザイン、舞踊や演劇などの芸術をはじめ、広告、サインやシンボル、図表、写真、ビデオやテレビ、映画、コンピューター・グラフィックスなどの文化財、ファッションなどのポピュラー・カルチャーやサブ・カルチャー、さらには、家庭や地域を取り巻く人工的環境や自然環境など視覚的なものすべてが含まれる。前述のビジュアル・リタラシーの理論は、視覚言語を言語

と対比して説明するため、どちらかといえばモデル1に近い。例えば、言語による「読む」は視覚言語による「読む (鑑賞する, 解釈する, 批評する)」と、また「書く」は「表現する」と対比される。視覚言語における文字や語彙、文法などに匹敵するものとしては点、線、面、色、光と影、構成、質感、主題やモチーフ、素材やメディア、大きさ、スタイル、シンボリズム、メタファー、メッセージなどがあり、視覚言語による異文化解説には記号論や心理学、解釈学、美学や哲学、歴史学、文化人類学、社会学等の助けを必要とする。

こういった特性をもつ視覚言語を媒体に異文化解説を行う場合、言葉で表現できない領域において、個人や民族が尊重している文化的意味や価値を発見することが可能である。一方では、視覚言語の解説には、対象となる物を観察し (observation, description)、分析し (analysis)、解釈し (interpretation)、批評する (criticism) 過程において言葉の助けを借りるところが大きく、言語なくしては成立しない点が限界として挙げられる。言語学や文学など長い歴史を背景にしたバーバル・リタラシーに比べれば、未だ確立をみないビジュアル・リタラシーの領域ではあるが、異文化間コミュニケーションの分野において、その可能性と限界の双方を踏まえながら、今後一層の研究が進められていくことが重要である。

西洋諸国においては、多文化教育の進展にともない、視覚言語による異文化読解の試みが様々行われており、文化人類学的アプローチ、社会的アプローチなどの手法も開発されている¹²⁾。幼児期から視覚言語で自文化や異文化を読み書きする能力を育てることは、今後日本における異文化理解教育においても必要なことだと思われる。

3. 絵本による異文化理解

絵本は「言語世界と視覚言語世界との間に存在する境界線を越えることのできる」文化財である¹³⁾。言語によるテキストと、視覚言語によるイラストレーションやイメージからなる絵本は、従来主として幼児の文化財とされていたが、近

年ではより年齢の高い子ども達や大人のための文化財としても認識されている。概して、絵本は子どもの発達段階に応じて、文字の少ないものから次第に多いものへといった具合に、文字で読む量が増えるように与える指導がされがちであるが¹⁴⁾、視覚言語による読解能力を考慮するならば異なった独自のアプローチが考えられるべきである¹⁵⁾。

アメリカやイギリスなどの、多民族、多文化型社会を宣言した西洋諸国においては、それぞれの社会に共存する様々な文化的背景をもつ子ども達にお互いの文化を理解させる手だての一つとして絵本が用いられている。また、グローバル・ビレッジに生きる一員としても、絵本を通して様々な文化圏の精神的価値観に触れることは重要だと考えられている。社会や地域や学校といった日常場面で異文化と直接的に接する機会の少ない日本においても、国際理解教育や異文化理解教育を推進するにあたって、絵本が果たす役割には大きなものがあるといえる。絵本は、異文化に対するイメージを視覚的に膨らませ、文学的あるいは芸術的にメッセージを伝え、異文化の精神的価値観をシンボル化して、ある種の感動とともに理解させる可能性をもっている。異文化に関する資料や教材の少ない現状において、絵本は国内外からの入手が比較的容易であり、今後教育現場において活用されるべく研究が進められることを期待したい。

ところで、私たちは一般に、絵画や彫刻、舞踊や演劇といった芸術を実際に美術館や劇場に足を運んで観るよりも、テレビで放映される番組の中で触れることの方が多い。また、雑誌やコミック、ビデオなどで紹介されるイラストや映像などのポピュラー・カルチャーに触れる機会は日常的にある。こういったメディアを通して異文化が紹介される場合、差別や偏見、ステレオタイプなどをなくす配慮をし、繊細な態度をもって取り扱うことの重要性が唱えられるようになってきてはいる。しかしながら、「ちびくろサンボ」の絵本をめぐる論争で代表されるように、何をもちいて是非とするかの解釈には様々なものがある。伝説や昔話を題材にした絵本にしる、また創作絵本にしる、そこには人々の暮

らしが描かれ、思考や行動のパターンが描かれ、生き方や価値観などが描かれており、読者はそれを真実の一つとして受け取る。自文化と異なる文化圏を題材にした絵本を手にする時、それが本当にその文化の真実を表現したものであるのか、その文化圏の人々にも推奨されるようなものであるのかなど問いかけることが必要である。メディアを使った異文化理解教育に、受け身的な態度を用いるのは無責任であろう。

マランツ¹⁶⁾によれば、異文化理解のために絵本を選択する条件は、文化の「真正 (authenticity)」にある。即ち、特定の文化がどれだけネイティブの視点からの真正をもって表現されているかである。具体的なチェック・リストとしては次の四点が挙げられている。

- 1) 特定の文化を表わすものであることが明確なこと
- 2) テキスト (言語) によって特定の文化の精神的価値観が表現されており、ストーリー性が豊かなこと
- 3) イラストレーション (視覚言語) によって特定の文化が正確に表現され、且つ、アーティストの独創性がみられること
- 4) テキストとイラストレーションが相まって、全体的に統一感があること

(Marantz 1994: 7)

ここで特定の文化という場合、特定の文化圏の中にも、過去や現在、メイン・カルチャーやサブ・カルチャー、移民の一世や二世、三世などでは異なった文化があることを配慮している。いつの時代の、どの地域のどういった人々にとっての真正であるかが、作者にも読者にも明確でなければならない。実際にアメリカにおいては、いわゆる良い絵本には、作者がどこでどう題材を収集したのかや、どこまで取材で得たもので、どこが独創なのかといった点について明記される傾向となってきた。こうした細かな配慮によって、読者が異文化に対するステレオタイプをもったり、過去と現在を混同して理解したりすることを防ぎ、一つの文化圏にも様々な価値観をもった人々がおり、様々な真実のあることを知る一助とするのである。

尚、マランツは異文化理解のためにアメリカ

の子ども達に読んでほしい絵本を選定するに当たって、便宜上世界を地域別に分け、それぞれの地域に代表される民族について三つの視点を用いている。それは、過去の文化、現在の文化、そして、その地域からの移民（〇〇系アメリカ人）の文化である。また、これらそれぞれについて、絵本研究歴40年の経験で培った主観的および客観的批判力をもとに、前述の四つの真正という観点から吟味すると同時に、各文化圏からの専門家の意見を聞きながら図書を選定を行っている。日本に関連しては約30冊の絵本が選定されており、伝説や歴史的な出来事に題材を得たもの、現代っ子の生活を扱ったもの、日系アメリカ人を描いたもの、戦争や原爆について語るものなどが含まれている。あるものは日本の絵本の翻訳版であり、あるものはアメリカの作家による創作であるが、いずれにしてもアメリカで発行され、入手が容易である。同様に、中国、韓国、ベトナム、カンボジア、インド、スリランカ、チベットなどのアジア諸国をはじめ、アフリカや南アメリカ、ヨーロッパなどの様々な国々や地域についての絵本が選定され、紹介されている。マランツの示した図書リストを一覧する時、アメリカという多民族、多文化型社会が、解決すべき諸問題とともに、豊かな教育資源をもっていることにあらためて気付かされる。

4. 絵本に読む日系アメリカ人のアイデンティティー

日系アメリカ人のアイデンティティーについては、既に多くの研究者の指摘するところである¹⁷⁾。アメリカにおける他の移民と同じく、一世、二世、三世などのエスニック・アイデンティティーには大きな差があり(江淵 1994: 237-242)、また同じ世代の中でも、日本のどの地域の出身であるかや、アメリカのどの地域への移民かなどによっても差異がみられる。様々な差別や偏見に見舞われた日系アメリカ人の軌跡であるが、中でも第二次世界大戦中に10カ所に設けられた強制収容所に送られた体験は、日系アメリカ人が共有する最も過酷な記憶となっている。アメリカ政府が戦中の日系アメリカ人の処

遇について自らの過ちを認め、補償金の支払いを決めたのは戦後40年以上を経た1988年になってからである。今、戦争の体験を持たない三世は、一世や二世の歩みを振り返り、自己のルーツを探り、自己のアメリカ社会における位置づけを見直す試みを始めている。

異文化理解教育が西洋やアジアの「人」や「物」や「文化」に目を向けている一方で、日系アメリカ人の歴史とアイデンティティーについては今まで紹介される機会が少なかった。日本に住むいわゆる日本人にとって、日系アメリカ人の文化は異文化であり、そのルーツに共通の文化的背景があるからといった簡単な理由で、そういった異文化を理解でき易いとするのは性急である。例えば、日本人が抱きがちな「懐かしく、暖かき、母なるふるさと」のイメージに対し、「憎きふるさと」や「帰りたくないふるさと」というものもあることを指摘し、日本人の「ものさし」で日系アメリカ人の心情を推測することの危険性を指摘する声¹⁸⁾を聞く時、異文化を正しく理解する資料や教材の必要性を感じる。

そこで、ここでは、前述のマランツの絵本リストから日系アメリカ人に関する四冊を取り上げ、ビジュアル・リタラシーとカルチュラル・リタラシーの視点から、絵本を使った異文化理解の可能性と限界について考察を加えることとする。

4-1. *Baseball Saved Us*¹⁹⁾

作者は日系アメリカ人三世であり、絵本は両親の強制収容所での体験に題材を得ている。それまでアメリカ社会で培ってきたものすべてを一瞬にして失った戸惑いや怒りを胸に、砂漠の中で鉄条網と監視の銃に脅えながら暮らす人々が、無実を叫ぶ声の代わりに、強制収容所の中にアメリカ文化の象徴である野球場を作ろうとする。野球は、少年をはじめ収容所で暮らす人々すべてに希望を与えた。やがて戦争が終わり、収容所を出る日が来るが、帰る家のある者もない者も厳しい差別や偏見に遭遇する。学校で他のアメリカ人に囲まれ、無視され、差別語で呼ばれる毎日の中で、少年に野球をする機会がくる。野次や罵声を後ろにバットを振ると、ホー

ムラン。絵本は、喜んで駆け寄る白人の子ども達に抱きつかれる少年の姿で終わる。

絵本は戦争を子どもの目で写実し、子どもの言葉で語ることに終始している。ハッピーエンドのストーリーは単純すぎるという批判もあるが、子どもの世界では仲間に受け入れられるということは重要な意味をもつのであり、読み手の子ども達にはその意味が十分に伝わるものと思われる。特に、主人公の少年で代表される日系二世にとっては、アメリカ文化に同化することはアメリカ社会で生き残り、成功することを意味していた。野球という文化的シンボリズムを話の中心に据えることによって、マイノリティーがマジョリティーの文化に受容されるということの意味が呈示され、力強いメッセージとなっている。色彩は一貫して砂漠の土色が使われている。人も衣服も、収容所の内外の住空間も、空の色もすべて土色で表現することによって、戦争という時代を収容所で生きた日系アメリカ人の心情を表している。そんな土色の空が、最後のページでは青空に変わる。青い空の色は、ホームランを打った少年の心を表現すると同時に、日系アメリカ人二世たちが、その後アメリカ社会に受け入れられていくことを暗示している。

ストーリーを表す文字の量は最後になるにつれて少なくなり、イラストレーションの連続で話が進展し、最後はイラストレーションのみとなって、読者は各自が視覚的に結末を読みとるように構成されている。結末を言葉で語らず、視覚言語で語ったことにより、絵本を媒体とする最大の効果を発揮している例の一つであろう。

4-2. *The Journey : Japanese Americans, Racism, and Renewal*²⁰⁾

この絵本は作者が製作した5枚の大きな壁画がもとになっており、作者自身が書いたストーリーに添って、壁画の中から適した部分が選択されアレンジされ、絵本用にデザインされたものである。絵本は日系アメリカ人の軌跡がテーマで、特に第二次世界大戦に焦点を当てながら、終始客観的に事実を述べる口調で語られている。感情的な言葉や表現を避けることによって、日

系アメリカ人の体験がストレートに心の中に入ってくる。

シンボリズムとして採用されているのは桃太郎の昔話に出てくる「桃」である。三世の作者にとって、一世や二世は遠い昔に桃で象徴される豊かさを求めて日本からアメリカに渡った人々である。絵本は、桃を片手に差し上げ、希望に満ちた一世の笑顔で始まる。が、農場での過酷な労働、安価な賃金、差別や偏見による法律、強制収容所への送還と続き、戦後の市民権運動への参加などを経て、絵本は四世の子どもが桃を片手に笑顔で駆け出す姿で終わる。その他のシンボリズムとしては文楽や能が取り入れられ、日本的な表現形式も用いられている。例えば、日系アメリカ人を強制収容所に送ることを決定した裏には、より深い政治的、経済的動機があったことを示すために、政治家を文楽人形に仕立て、それを更に後ろで操る黒子を配置している。また、この決定に抗議する日系アメリカ人の代表者達に能面をつけさせ、彼らが怒りよりは平静の感情をもって裁判に望んだ様子を表現し、日系アメリカ人の精神的価値規範や行動様式が示されている。

アメリカ兵としてアジアに出兵し、日本を敵に戦う二世の息子達を誇りに思いながらも、自己の文化的アイデンティティーの抛り所の喪失に悩む一世の親たち。アメリカ市民であることを証明するためにヨーロッパに出兵し、ナチの強制収容所からユダヤ人を救う大きな役割を果たす中で、同様の収容所行きを強要したアメリカ政府への矛盾を感じる二世。終戦後、日本でもアメリカでも居場所を見つけれなかった人々がいる一方で、「民族の喪失」ともいわれるほどアメリカ化を進めていく人々。一口に日系アメリカ人という言葉で片づけられないような様々な人々の様々な体験を、写真のようなリアルさで、しかしながら絵画に凝縮され象徴された質感をもって、絵本は語り続ける。

先に述べたように、この絵本はもともと5枚の壁画からなる一つの美術作品であり、視覚言語のみで語られた作品であった。そのため、絵本においても視覚的メッセージの豊富なものとなっている。テキストにみられる淡々とした語

り口調と、イラストレーションから滲み出る力強い語りかけとが融合し、読者もいつしか日系アメリカ人の軌跡を歩いているかのような錯覚を覚える。

4-3. *Granfather's Journey*²¹⁾

日系アメリカ人三世の作者は、この絵本を通して日米二つの文化の架け橋となる精神的なものを表現しようとしている。絵本はその題名が示すとおり、作者の祖父の体験をもとにして描かれた作品である。紋付きを着ている祖父のポートレートと、洋服を着て太平洋を渡る船の上に立つ祖父の姿のコントラストで絵本は始まる。広大な国土を汽車や汽船を乗り継ぎ、肌の色の様々に異なる人々と出会い、仕事を転々とし、ついに一カ所に落ちつく。一時帰国した日本の郷里で幼なじみと結婚し、アメリカへ連れていく。白いドレスで身を包み、金髪の青い目の人形を傍らに記念写真を撮る娘を描いたページは、移民先のアメリカでそれなりの成功を修めた一家のシンボリックな表現となっている。

二つの祖国の間で揺れ動く心を、絵本では自然描写のコントラストで表現している。乾燥し澄み切ったアメリカの空気と、湿った空気と霞むような日本の情景が、その間を行き来する魂を感じさせる。まるでアルバムに貼られた写真を見ているかのような描写は、題名が示すとおり、一人の人間が辿った人生の旅路を再体験するに相応しい形式となっている。アメリカで成功した後、祖国への思いから日本への帰国を決心するが、一時の歓迎期間を過ぎると、西洋風に育った娘は郷里の風土にとけ込めないことがわかる。娘の結婚と孫の誕生後、第二の祖国アメリカへの思いは増す一方で、ついにアメリカ行きを決心したところで第二次世界大戦が勃発する。アメリカの土をもう一度踏みたいという思いを残したまま亡くなった祖父の願いを胸に、成長した孫は祖父の第二の故郷へと旅立つ。絵本の最後において、現代風の洋服を着てアメリカに到着する孫のポートレートは、絵本の初めに洋服を着てアメリカに向かう祖父のポートレートと重なり、家族の中に受け継がれていく精神的なものを暗示している。成長した孫は、祖

父と同様に一つの祖国にいる時はもう一方を思いといった具合に、二つの祖国の間で揺れ動く。しかし、どちらに帰属するべきかを問い続けた祖父に対し、孫は「二文化人」に成長した自己への誇りを込めて、この絵本を発表するに至っている。

4-4. *Tree of Cranes*²²⁾

これは作者自身の体験をもとにした創作絵本となっている。日系アメリカ人の家族が、日本での日々の暮らしの中に文化を融合する様子を、折り鶴をシンボルにして表現したものである。絵本のあちこちに日本の情景や日本式住居が丁寧に描写してあり、日本の文化を異文化として受け取るアメリカの読者のために、日本文化の精神的なものが伝わるようにという配慮がなされている。アメリカではクリスマスが近づくと家族で樅の木を切りに行き、家族揃ってクリスマス・ツリーの飾り付けを行う習慣がある。絵本の中では、庭から掘ってきた松の木に折り鶴が飾り付けられる。松も折り鶴も日本文化の象徴である。部屋におかれた松の木は、折り鶴で飾られてクリスマス・ツリーとなる。ツリーにはキャンドルが幾つもつけられ、親子で火をともしていく。こうすることによって、日米二つの文化が一つになることを暗示している。

西洋式のクリスマスが一般となっている現代の日本において、絵本で描写されているような風習は実際には行われず、日本人の読者には奇異なものとして映る。しかしながら、作者は長い期間日本での生活を送っており、またイラストレーションを日本人のもとで学んでいるため、これらを作者の誤った文化描写ととらえるには無理がある。むしろ、それらを作者の祈りにもとづく創作と捉え、そのメッセージを受け取るの方が重要である。クリスマス・ツリーに向かい日米間の平和を願う母親（二世）は、二つの文化の架け橋になることを期待された世代であった。一方、母親の膝に抱かれた息子（三世）は、日米二つの文化が融合された中から新しい文化を創造していく世代である。クリスマス・ツリーに向かって祈る二人の姿に、世代間の意識やアイデンティティーの違いを読

みとることができる。一方、読者の視線は、クリスマス・ツリーから、やがてそれを静かに見つめる親子の視線と重なり、絵本のあちら側とこちら側で、日本でもなくアメリカでもない新しい世界への希望に思いを馳せるようになる。それはまさしく映像のなせる力であろう。

4-5. 考察：視覚言語による異文化読解のために

前出の二つの絵本は油彩、後の二冊は水彩で描かれ、前者は動的、後者は静的な印象を与える。どちらかといえば日系アメリカ人全体の声（集団の歴史や記憶）を代弁している前者はダイナミックな表現形式がふさわしく、個人的なメッセージ（自己のルーツやアイデンティティー）を送っている後者は淡々とした表現がふさわしいといえる。いづれにしても、日系三世であるこれら絵本の作者たちは、絵本の中で日本文化を継承し、さらに日系アメリカ人の歴史や生活、意識やアイデンティティーを表現することによって、新しい日系アメリカ人の文化を創造している。

ところで、絵本を通して異文化理解を行う場合、主として次の二つの点に留意する必要がある。第一は、特定の文化について一冊の絵本を読むに止まらず、数多くの絵本に触れることである。例えば、同じ日系三世の作家から生まれた作品といっても、様々に異なったものがあることを知ることによって、日系アメリカ人の文化についてステレオタイプの理解に陥ることを防ぐ助けとなる。第二は、一冊の絵本は読者によって様々な受け取られ方がされることに注意することである。絵本は普遍的なメッセージをすべての読者に伝えると同時に、個々の読者に異なったメッセージをも与える。例えば、日系アメリカ人に関する一冊の絵本を手にした時、アメリカ社会のマジョリティーであるいわゆる白人の人々、アメリカ社会のマイノリティーであるアフリカン・アメリカンやメキシカン・アメリカンの人々、比較的新しい時代のアジアやヨーロッパからの移民の人々、そして日系人、更には日本に住む私たちなど、それぞれの文化的背景によってそれぞれに異なった解釈や理解

のしかたがされ、異なった示唆を与えるであろう。

本論において先に述べたように、映像を視覚的に読むには様々な方法が開発されている。その代表的なものには、批評学的アプローチや美学的アプローチ、美術史のアプローチ、文化人類学のアプローチ、社会学のアプローチ、心理学的アプローチなどがある。これらのアプローチはまた、言語と視覚言語を使った文化財である絵本において異文化理解を行う時に、有効な手段になると考えられる。が、どのアプローチが最も効果的であり、具体的にはどのような効果があるのか、それらは今後の研究課題として残されている。

おわりに

本論では、異文化間教育学で言及されることの少なかった視覚言語について取り上げ、視覚言語が異文化読解に果たす役割について絵本を題材に呈示することを試みた。視覚言語をめぐる理論は未だ確立していない現状にあるが、国際的なメディア技術の発達にともない、視覚的情報を読みとり、発信し、異文化とビジュアル・コミュニケーションを行う機会は増える傾向にある。視覚的に異文化に繊細な態度や、視覚的に情報を吟味し、文化的差別や偏見、ステレオタイプに陥らない態度、視覚的に異文化を読み、理解し、尊重できる能力など、教育を通して育成しなければならない課題は多い。文字からなるテキストの読解については幼児期から大人まで系統だった教育環境が用意されているが、映像などの視覚言語の読解についても、今後同様の教育環境が整えられていくことが望まれる。

言語と視覚言語からなる絵本では、異文化にかかわる事物や事柄、精神的なものや文化的価値観などを文字と映像の両方の助けを借りて示すことができ、読み、理解することができる。日系アメリカ人のアイデンティティーについていうならば、小説や詩などの文学の世界で次々と発表されているような、より身近な現代の問題、例えば、日常生活における親子間のアイデンティティーの葛藤や反発、社会や学校などで子ども達が直面する悩みや問題などについても

題材とされるならば、「今」を考える国際理解教育や異文化理解教育の生きた教材としてさらに役立つと思われる。絵本は純粋に文学の一つとして楽しめるべきという批判もあろうが、比較文学の領域においても文学による異文化理解研究が進んでおり²³⁾、このことから絵本による異文化理解へのアプローチは有意義なものだといえよう。

注、および参考文献

- 1) 異文化間教育学会 「異文化間教育」アカデミア出版会 1987-1996年
- 2) 小林哲也・江淵一公 「多文化教育の比較研究」九州大学出版会 1985年
- 3) 江淵一公 「異文化間教育学序説」九州大学出版会 1994年
- 4) 多くの著書があるが、最近のものでは例えば、Denoon, D. et al. *Multicultural Japan : palaeolithic to postmodern*. Cambridge University Press. 1996.
- 5) Berger, J. *Ways of Seeing*. BBC and Penguin Books. 1972.
- 6) Boughton, D. Visual Literacy: implication for cultural understanding through art education. in *Journal of Art & Design Education*. 1986. 5, 1 & 2, pp. 125-142.
- 7) 松浦寿輝 レトリック—Madonnaの発見, そしてその彼方 小林康夫・船曳建夫編「知の技法」東京大学出版会 1994年 pp. 115-134
- 8) Barrett, T. *Criticizing Art : understanding the contemporary*. Mayfield Publishing Company. 1994
- 9) INSEA 23rd World Congress. *Arts in Cultural Diversity*. Australia. 1978.
- 10) Mason, R. Art Education as a Medium for the Transmission of Aesthetic and Cultural Values. Report for UNESCO International Symposium on *Qualities required of education today to meet foreseeable demands in the twenty-first century*. 1989.
- 11) ジェームズ・カップ, 中野道雄 「ボディ・ランゲージ事典」大修館書店 1985年, また, リージャー・プロズナハン著, 岡田妙・斎藤紀代子訳 「しぐさの比較文化: ジェスチャーの日英比較」大修館書店 1988年, 他
- 12) McFee, J. and Degge, R. *Art, Culture and Environment : a catalyst for teaching*. Kendall/Hunt Publishing Company. 1977. または, Mason, R. *Art Education and Multiculturalism*. Croom Helm. 1988. 他
- 13) Hunt, P. *Criticism, Theory and Children's Literature*. Blackwell. 1991. p. 176.
- 14) Iwano, M. Ideal Environment for Picture-book Reading. paper presented at INSEA 6th Regional Congress of Europe, Africa and the Middle East. Cyprus. 1982.
- 15) Hunt, P. Cushioned by Confidence : using picture books as a resources for differentiated learning'. in Bearne, E. (Ed.). *Differentiation and Diversity*. 1996. pp. 76-92.
- 16) Marantz, S. and Marantz, K. *Multicultural Picture Books : art for understanding others*. Linworth Publishing Inc. 1994.
- 17) 田中圭治郎 アメリカにおける「日系人」, 「日本人」子弟の日本語・日本文化教育 前掲注2) pp. 181-206, または, 江淵一公 前掲3) pp. 207-302, 他
- 18) ムルハーン千栄子 報告 「比較文化シンポジウム: ふるさと—理想郷を求めて」福岡女学院大学公開講座 1995年
- 19) Moriguchi, K. and Lee, D. *Baseball Saved Us*. Lee & Low Books Inc. 1993.
- 20) Hamanaka, S. and Frederick, S. *The Journey : Japanese Americans, Racism, and Renewal*. Orchard Books. 1990.
- 21) Say, A. *Granfather's Journey*. Houghton Mifflin Company. 1993.
- 22) Say, A. *Tree of Cranes*. Houghton Mifflin Company. 1991.
- 23) Bassnett, S. *Comparative Literature : a critical introduction*. Blackwell. 1993.